

『文訓』における「和歌」の位置づけ

田 畑 真 美

富山大学人文学部紀要第61号抜刷

2014年8月

『文訓』における「和歌」の位置づけ

田 畑 真 美

一、問題の所在

本稿の目的は、江戸前期の儒学者貝原益軒（1630-1714）が和歌をどのように位置づけていたかを明らかにすることである。なぜ和歌に着目するかについては、以下の理由がある。論点を多少先取りする形になるが、さしあたり挙げておく。

まず益軒は和歌を漢詩に比して日本人に合うものとして取り上げており、和歌の学びを特に推奨している。これは学びと生まれつきの性質や条件との関わりを考える際に、大きな手がかりの一つとなり得る。この視点からは水土論に基づく日本の優秀性、ひいてはナショナリズムの問題も生じうるが¹⁾、今回は深くは踏み込まない。日本人としての生まれつき、環境、風俗が、その学ぶ対象の向き不向きとどう関わるかといった、学ぶ主体と学ぶ対象との関連で考えたい。次に、益軒が作歌について才能の有無と関連させて語っていることである。確かに才能の有無は学そのものにおいても言及されており、才の問題は益軒にとっても重要な問題の一つであったと言えるが、特に注目したいのは、和歌や漢詩などの文芸制作について、不才の者の自主制作を戒めている点である。のちにも指摘するように、この背景にはまず作品を披露して自身の力を「ほこる」姿勢、すなわち高慢に対する戒めがある。さらに学を本とし、芸を末とする益軒自身の立場からすれば、益になるどころか本である学の妨げになり、時には他者から恥辱を得るといった害までも引き起こす営為に貴重な時間や心血を注ぐことは価値がないとされるという点も挙げられる。益軒の学問観そのものとかかわるこれらの視点も重要であるが、それを踏まえつつここでは特に「自分ではつくるな」と益軒が言う意図に注目したい。ポイントは益軒が、実際に作ることと和歌を学ぶこととを厳密に区別していることである。先取りすれば「自分で」つくることは戒められるにもかかわらず、古歌を自分のものとして時宜にあった形で自身の感情を表現できるようになることは推奨されている。むしろそれが可能になることが、和歌の学びの真髄だと益軒は考えていると推察しうる。和歌は無駄ではないのである。

益軒において和歌の学びは文武で言えば文にあたり、学芸で言えば芸、すなわち末ではあるが、人間存在、ことに日本人にとって不可欠なものとしてされている点は疑いない。以上の理由を踏まえながら本稿では、人間存在特に日本という土地に生き、日本の言葉を使用する日本人にとっての和歌とは何か、またそれを学ぶとはどういうことかを巡る益軒の考えを、和歌についての言及が多い『文訓』²⁾に即して明らかにする。そしてそれを人間が学ぶ意味と関連させながら、益軒が描くあるべき人間像を浮き彫りにする一助としたい。

なお、本稿のような小論では到底目指すべくもないが、一点だけ、この営為がより大きな問題意識に連なっていることのみを指摘しておく。先に述べた「益軒が描くあるべき人間像」という文言は、究極的にはこの問題意識を踏まえたものである。簡単に言えば、日本思想において人間が学ぶべきもの、それを学ぶことによって人としてふさわしいありようを築き上げるもの—それは教養という語で表せるかもしれない—にはおおよそ、二つの系統があった。³⁾ 伊勢・源氏物語系統の情や美の世界に関わるものと、儒教の教説における「道」がそれである。この二つの系統をどう位置づけ、学びを考えるか、各々の思想家の模索が顕著になるのはことに近世においてであるが、近世前期の儒学者貝原益軒の中でも、この2つの系統の問題は教育や学習といった実践の場面も含めて意識されていたと考えられる。もちろん益軒においては本としての聖学の学びが重視されるのであるが、益軒のスタンスを知ることは近世、ひいては日本思想全体の知のありようの解明の一助になると考えられる。この大きな視点が背後に控えていることを念頭に置きながら、以下、考察を進めていきたい。

二、和歌の機能と効用

それではまず、簡単に益軒が捉える和歌の機能について確認しておこう。益軒は和歌について次のように述べる。

むかしは和歌は好色の媒にかぎらず、人倫の交に、たかきもいやしきも、折ふしにつけてやまとうたをよみ、送り返して情をかよはし、志をあらはせし事、後代の及ばざる処なり。

(『文訓』上之本)⁴⁾

ここで益軒は、和歌の機能を自らの情や志を相手に伝達し、相互理解を図るものとして捉えている。それは「人倫の交わり」つまりあらゆる人間関係において、貴賤尊卑にかかわらず用いられるものともされる。端的に言えば和歌は、全ての人間存在が他者とかかわる際に詠まれるものであり、人間存在とは和歌を詠むものだという理解が読み取れる。こうした益軒の理解は、『古今和歌集』仮名序を踏まえたきわめてオーソドックスなものともみてよい。和歌は「人の心を種と」するものであり、「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」なのである。

この際、注意したい点が二つある。まず一つ目は、「人倫の交わり」と「好色の媒」との対比である。益軒は和歌を「好色の媒」つまり男女の恋愛関係に限るものではない旨、主張している。裏を返せば、益軒の時代には和歌を「好色の媒」に特化して理解することが一般的になっていたということでもある。もちろん仮名序においても、和歌が「好色の媒」に流れることがすでに指摘されている⁵⁾ので、この風潮は近世に至って初めて生じたわけではないことは確かであるが、益軒が留意するのは仮名序も指摘している、和歌が人情を表すもの故に孕む危うさであろう。その風潮に対して益軒は、和歌は本質的、本来的には全ての人間の営為であると言っているのである。なおこの主張は、風雅と淫靡との相違の主張とも緊密に絡む。風雅と淫靡につい

ては後述するが、「好色の媒」となる場合はその性質上、淫靡になる可能性を多分に含んでいる。その場合は注意しなくてはいけないと益軒は考えているのである。風雅と淫靡の境界はどこにあるかが問題であるが、言えるのは、益軒は伊勢源氏などの「むかし」の王朝のものは基本的に雅ではあるが、淫靡の質も含むこと、そうであるにもかかわらず、後代の小唄や浄瑠璃などとくらべれば雅であると認識していたのではないかということである。このことは『和俗童子訓』で幼児教育に関して淫乱色欲をおさええる必要性や、女性教育において風雅を学ぶ必要性が言われている箇所からも推察しうる。⁶⁾

またこのことは二つ目の視点、すなわち「むかし」と「後代」との対比とも絡んでくる。大雑把に言えば、すでに古代からそういう風潮があったにせよ、「むかし」と「後代」を比すれば和歌の本質は断然前者において明らかに保たれていたと、益軒は理解していると言える。だからこそ益軒は「後代の及ばざる処」という表現をするのである。先に指摘した和歌の本来的な機能は、益軒が生きる世も含めて、後代においては衰えていると位置づけられているのである。当世認識としては人間の情の衰え、質の低下があったのであろう。とすれば、当世において和歌を学ぶとは、この本来的な機能をおさえながら、淫靡に流れないことということになると言えよう。だから益軒は次のように言うのである。

和歌を以て好色のなかだちとせし風俗あり。わが国のならはしなりとて、あしき事はまなぶべからず。(『文訓』上之本p.327)

後世の悪しき風俗に留意しながら、本来的な機能を最大限に生かすこと、それが目指される和歌の学び方であった。またこのとき、学ぶべき和歌が「古歌」であり、具体的には「万葉集、古今集を先として諸集をよみ、その中の秀歌」(『文訓』上之本p.326)を覚えることである点がまさに、重要である。和歌は和歌であるから何でもいい、もしくはこういう風潮だからそれでよいというのではなく、古代の、しかも優れたものを学ばねばならないのである。つまりは学びにモデルがあるということである。モデルとは淫靡ではない、つまり裏返せば雅なものである。なおこの点に関して益軒は、漢詩について触れるときも、同じスタンスを取る。和歌にせよ漢詩にせよ、「芸」にあたるものを学ぶ時、それは「学」における時と同様、ふむべき基準を持つ。さしあたり、それが雅、風雅である。もっと言えば、雅に情や志を表現し伝え合うこと、雅な他者理解と自己表明が、和歌を学ぶ理想のありようなのである。そして情や志を伝えようとするときに、言葉が問題となる。これは漢詩よりも和歌の学びと制作が優先されるという問題にも連なる。先取りすれば、和歌の情や志の表出と伝達という機能が十分果たされるには、通じやすくなじみあるそれ故に自分のものとしやすい言葉が不可欠となるのである。⁷⁾

ではこの秀歌とは何か。秀歌を学ばなければならないのはなぜなのか。以上のことを踏まえてつづさらに見ると、和歌の機能であり効用でもある点に行きつく。益軒は和歌を「心をやしなふ道」(同)、もしくは「性情をやしなふ助」(同p.326)であるという。これに対して、和歌が

単なる「好色の媒」となれば逆効果, 「心をそこなふ」(同p.327) ことになるという。養われるべき心とは風雅な心であるが, それはどんなものであろうか。さしあたり淫靡ではないという説明はしうるが, 積極的にはどういう説明が出来るだろうか。

てがかりとしてはまず, 益軒が漢詩も含めて, 詩歌は教えであるとしている箇所にある。

詩を学べば, おのづから良きこと, 悪しきこと, 聞くにしたがひて, 感をおこして, よきことをこのみ, あしきことをきらふ。是人の心をみちびきて, しらずおぼえずして, 正しくよきかたにうつりゆかしむるをしへなり。(中略) (聖人が漢詩を) 教とし給ふは, 愚なる民俗のいひし事も, 皆人情をのべて理あり。これを見聞きすれば, 人の心を感じしめて, 善にうつり悪をいましむる助となれり。和歌もまたかくの如し。いにしへ和歌をよくよめる人, 必賢人君子にもあらざれども, 其内に人情をよくいひかなへたる事多し。是亦其歌に感じて善心をおこし, 情をもよほす助けとなれり。(同下之末p.352)

このように, 詩歌はいずれも人の心に訴えて善悪を教える機能を持つとされる。理で知るのではなく, 善を好む姿勢が養われるのである。前述の「心を養う」には, 善を好み悪を避けるありようも含まれると考えられる。風雅と善を完全に重ねることは出来ないが, 淫靡を淫靡として嫌う心が善を好み, 悪を嫌う心であるとすれば, 二つの方向性は重なると言える。淫靡が悪と位置づけられているのは, 淫靡を「不経なること」(同下之本p.346)⁸⁾と表現していること, また次にいう「風体正しからず」という表現からも明白である。

またその前提として, 詩歌に表された人情の理解があることから, 人情を理解すると善を好むことと風雅との共通性も推測しうる。この点をより明らかにするために, 次の箇所を見よう。

古はいやしき人まで和歌をよみて, たがひに其のなさをかよはしけるこそ, うるはしき事に聞こえ侍れ, 風体を正しくせば, 好色の媒とせずして, 人倫のまじはりに心をあつくし, なさをふかくするたすけともなりなん。(同上之本p.328)

重要なことはまず, 和歌を詠む際に「風体を正しく」することである。そうすれば, 「好色の媒」と人情の交感とは厳密に区別できるというのである。「風体を正しく」するとは, 俗な卑しい言葉を使用したり, 心を表したりせず風雅な心言葉にすることである。そして, 続く箇所の人情を深く知り, 人間関係においてお互い驚く心を致すというありようこそが, それによって遂げられる善である。すなわち, 善にうつるというときに想定されている中身は, 人情を知り, 人を尊重し愛することなのである。⁹⁾ 厳密に言えば, 人情を知るからこそ善悪の区別が分かり, 積極的な意味の善, 人倫を愛することが可能となるのである。このことは, 益軒における恋の拡大解釈を踏まえると, いっそう明らかである。益軒は「恋とは人をおもひしたふを云う。おやをしたひ子をおもふをはじめて, 情ふかければ思ふ事せちなり。是また恋にあらずや」(上之末p.327) とし, 恋は男女の恋愛だけをいうのではないとする。¹⁰⁾ そうではなくどの存在であれ他者を深く思い慕うことが恋であるとして, 益軒は他者を深く思うことの尊さを主張す

るのである。和歌は、男女のみならず全ての人間関係における他者への切なる深い情を表すものである。そう捉えれば和歌は、単なる男女の恋愛のみにかかわるものではなく、したがって淫靡な部分にいたずらに迷わされることはない、益軒は考えているのではなからうか。ともあれ、人情間の深い理解やそれに基づく交流が人間全般の志向し望むものすなわち善として考えられ、それを可能にするのが風雅な心と言葉である。とすれば、養われるべき風雅な心とは、人と人をつなぎ、深く理解し共感し合う心であるとさしあたりは言えよう。

次のてがかりとして、益軒が「心をやしなふ」と並行して和歌を「心をやはらげたのしましめ」(同p.326)のものと説明する点に着目したい。「心をやはらげ」ることであるが、「やはら」いだ状態と風雅とは通じると言える。益軒が『大和俗訓』『和俗童子訓』など多くの主著の随所で主張する、人と接するときの温和さ、やさしさはこの和らいだ心の状態において表されるものであると考えられる。たとえば、『和俗童子訓』では益軒は次のように言う。

又諸人に交るに、温恭ならしむべし。温恭はやはらかにうやまふなり。これ善を行ふ初なり。こころあらしきは温にあらず。無礼なるは恭にあらず、己を是とし、人を非として、あなどる事、かたく戒むべし。(『和俗童子訓』巻之一 『益軒全集』巻之三p.175)

かたくなではない従容とした心は緊張からとかれ、他者を広く受け止めることができよう。つまりこの状態は、自己と他者双方において平安のある状態であると考えられる。自己に即せば善を行える状態であり、他者に即せば、善を享受しうる状態とも言えよう。それゆえ、益軒は温恭を「善を行う初め」というのである。ところで益軒は「心平に气和すれば物我公共しおのずから物と相親しむ」¹¹⁾とも言っているが、心のやわらぎは物と自己との隔てをなくし、親和させるといふ。これも、善の初めと言えよう。以上から和歌は心を和らげ、人間を善につなげる機を与えるものであることがわかる。

それに対して、「たのしま」せる方は、専ら自身の心にかかわる事態である。「楽」は益軒の思想の中核をなす概念であり、究極的には「天地の道」にしたがい、人としての道を日々生き、自分を取り巻くすべてのものをよしとして受け止める安楽さを指すと言え¹²⁾、和歌についてもその基調は当てはまると言えるが、和歌の効用としては特に「なぐさめる」との関連でみるとよいだろう。益軒は言う。

もろこしの王抑菴と云し人は、わが意にかなはざる事あれば、其事に相似たる古人の詩をよんで、わが心をなぐさめしとなり。和歌は猶わが国の詞なればわが心にかなはざることあらば、古歌を吟じて心をなぐさむべし。是又心を楽ましめ、うれひをさる一の術なるべし。(『文訓』下之本 p.349)

意に沿わぬことがあり心が鬱屈し憂いに沈んだ場合の詩歌の効用である。詩歌は人情を表現するものであるから、あらゆる状況のあらゆる人情を扱っていると考えられる。今の状況と似ている感情を表現したものもあろう。その詩歌を吟じることが心を慰め、安楽を与えるという

のである。ここでは和歌はままならぬこの世を受け止める術として、人間にとって大きな意味を持つとされている。もちろんそれは漢詩の機能でもあるが重要なことは、和歌が人間と世界との向き合い方に関与することである。平安に安楽に、いまここにあることを受け止めることは、真の意味の楽である。人間としては、その真の楽を味わうべきである。こう考えてくると、益軒において和歌は人間存在のあるべきありよう全体に深く関わり、人間存在と不可分に位置づけられると考えられる。だからこそその学びが欠けるもしくは不徹底ならば、それは重大な欠如となる。和歌は文武の文でもあるが、文武のどちらかが欠けるのは人間としての「欠け」の状態として、深刻に受け取られている。だからこそ益軒は、武士にも和歌を詠むことが必要であるといい、それが欠けているのを惜しむのである。¹³⁾ 日本に生きる人間としては、和歌を学び、それを自身の生に即して生かすことが求められているのである。

以上、おおまかに和歌の機能と効用について見たが、和歌は善との関わりや世界との向き合い方など人間存在にとっての重要な課題とかがわかることが確認された。和歌の学びは必須課題なのである。最後に和歌の学びについて付け加えておくが、端的にはそれは風雅な心と言葉を身につけることであった。古と今であれば風雅は古にある。日本に生まれたからといって、無条件に風雅が身につくわけではない。益軒は心と言葉では、特に言葉の方を評価する。たとえば、「やまとうたはその意温雅にしてその詞やさし」（同下之末p.361）、「わが日の本、上古の言は、元より風雅にして、中臣の祓の五徳、また歌のことばに似て、今の俗の俚語に大にかはりて、卑しからざるべし。（同p.355）」、「和歌はわが国のことばにて、あさはかなるやうにきこゆれども、ことば風雅にして古にちかく、心和平にして情深し。しかればもろこしの名家の詩にも、其の品格をさをさおとるべからず。」（同p.350）という。それに対して今の言葉は「俚語」で卑しいのであるが、次章以降でも触れるように、だからこそ古の言葉をことさら学ぶ必要があるのであり、また古とはいえ日本の言葉であるため、学びやすく通じやすいのである。古と言うとき、益軒は「万葉集、古今集を先として諸集をよくよみ」（同上之本p.326）というように『万葉集』『古今集』を中心に代々の勅撰和歌集、歌人の私家集やその他歌物語を挙げることから¹⁴⁾、古代中世の和歌を想定していると考えられる。また前にも触れたがその全てを学ぶというのではなく、「秀歌」を学び自分のものとし、悪しき風俗は切り捨てる態度も同時に提示している。¹⁵⁾ 風雅の具体的なありかたは、これらの集をみればイメージできよう。

さて、以上を踏まえて次に考えるべきことは、なぜ漢詩ではなく和歌かということである。益軒によれば「詩も又風雅の道」（同上之本p.328）というように漢詩も和歌と同様「雅の道」であるため、和歌に当てはまることは漢詩にも当てはまる。一般的に考えれば儒者としては漢詩の学びの優先が当然のようにみえるが、『文訓』では和歌の学びが繰り返し主張される。さらに和歌を学ぶ究極目標は、秀歌の自作ではなかった。和歌の機能に即して、人としてふさわしいありようを生きることが目標であった。「秀歌を誦しおぼえて、折ふしにかなひたる古歌

を詠じて、こころをなぐさめば、わがよからざる歌を、心をつくしてよむにはまさりなん。」(同 p.326) というように、自作より古の秀歌を自分のものとするのがよきことであった。益軒は何故このように考えるのだろうか。次章ではこのことを問題とし、和歌の学びについて検討する。

三、「国俗」と「才」

さてここでは和歌の学びについて、「国俗」もしくは「風俗」という観点、ならびに「才」という観点の二つの面から確認する。これらはいずれも、人間の有限な力ではどうしようもできない超越的な力、摂理といったものを背景にする概念である。前者はどの土地に生まれ育つか、その土地がどのように作られているか、その土地の性質はどうか等に関することである。益軒は日本に生まれた我々を規定し影響を与えるものを、「国俗」「風俗」という言葉で説明する。一方後者は、個人個人の問題である。日本に生まれ育つという日本人一般に課せられた運命のほかに、個々に生まれ持った才能の有無が問題となる。つまりこれらは、人間が生まれながらに負う制約を巡る議論であり、益軒は2つの制約、人間がかくあらしめられているというありかたの輪郭を説いていると言える。換言すれば、人間のありようを根底で規定するところの「天」(「天地」)において、人間の営為を考えているのである。

この視点を踏まえながら、まず前者について考察する。益軒は次のように言う。

和歌はわが国俗の宜しきわざにて、ことばさとしやすく、心も通じやすし。此故に古人の歌きはめてよき事、もろこしのすぐれたる唐詩におとらず。(中略) 漢詩はわが国の風俗にそむけり。国土に宜しからず。こころことば同じからざる故に、かよひがたくしりがたし。

(同上之本 p.327)

ここでは、心と言葉の通じやすさが国俗に合う合わないの具体的な内容となっている。ここで通じる、さとす、しるという語で説明される知は表面的な知ではなく、自分の内に浸透していく、真に自分のものとなる知り方を指すと言える。というのは心と言葉を真に知ることが、漢詩もしくは和歌の上手な制作を真に可能にするからである。上手な詩歌とは、言葉を正しく使いこなし、しかも俗ではなく雅に表現し、自身の情志を十分に表現しているものである。日本の漢詩の作者はどんな名家でも中国の下手な作者にも及ばないと益軒は言うが、そのわけは「風体正しからず」(同上之本)、文字や文法の誤りがあるからである。¹⁶⁾ 御しがたい言葉を使いこなし、情と志を十分に述べることはハードルをいくつも抱えた困難事である。益軒は「わが国に宜しからざる事を作るは、土宜にかなはず。」(同 p.327) というが、この営為はまさに国俗に合わない「宜しからざる」ことなのである。

一方、和歌はどうか。

やまとうたはその意温雅にして其の詞やさし。精巧なる事唐詩におとらず。(中略) わが

国の詩と文とに比べれば、大にまされり。是わが国のよろしき詞なる故なり。しかればわが国のかなはざる、つたなき詩文を作らんよりは、国俗にかなへる和歌を作るべし。

(同下之末p.361)

益軒はここで漢詩に遜色なきものとして和歌を位置づける。よい和歌が作れるのは「よろしき詞」を伝える「国俗」ゆえである。「よろしき」詞にそって、優れた和歌を詠む。それで十分ではないか。極論を言えば、「わが国の俗、和歌にて情をかよはし志をのべば、事足りぬべし。」(同p.329) というように情志の陳述に関しては和歌に特化するのが国俗であって、漢詩は必要ないというのである。このことはさらに心、言葉の通じやすさ、「よろしき」のみならず、そもその日本の国の性質がそうした心、言葉を生み出しているという観点からも説明できる。

日の本はもと温和慈愛の国なる故に、和歌も温雅にして情深し。(同下之末p.363)

日本の「国俗」を「温和慈愛」あるいは「淳美」(『自娛集』卷之二「国俗論」とする根拠は、水土論にある。中国や日本の他の国に対する優秀性を東に位置すること、時気が偏らず中正であること(同卷之二「本邦七美説」)によるというのであるが、その根拠はさらに「天地」に求められる。益軒によれば人や物はすべて天地によって生まれ養われている。とすれば日本の上記のようなありようは、「天地」によってそうあらしめられているということになる。「温和慈愛」「淳美」といったありようはその存在そのものにはじめから規定されている、いわば天性であった。そしてその天性にしたがい、人間はそれぞれの営為を展開するのであるが、その天性にしたがって築き上げられてきたのが習わしというものである。「国俗」とは「天地」に根拠を置き、天性とそれに沿ってつくられてきたありよう、生き様であると言えよう。つまりは、そもその土地のあり方である「温和慈愛」のありようが、心、言葉、そして和歌の性質をも規定しているのである。ここにおいて、不動の根拠を基として存する和歌は、漢詩に対して遜色ない存在価値を持つ。これは和歌に限らず、和文にも言えることである。ともかくそうした揺るぎなき根拠のもとに展開する、日本の文化としての和歌和文を尊重することこそが、日本で学ぶ者にふさわしいありようなのである。これを敷衍すれば、人間にふさわしいありようは、国俗・風俗にさからわず、それにあつたありかたを生きることであるとも言えよう。

もちろん儒者にとっては漢詩文の制作もまた重要な仕事、むしろ学者として必須課題である。益軒も漢詩文については、和歌と同様良いものをモデルとする学び方に即して、『文訓』の随所や『和俗童子訓』¹⁷⁾などで具体的な方法を提示しており、漢詩文の学びの必要性をおさえている。中国の良い詩文をよみならい、吟じることがその方法である。ここで注意したいのは、わが国の不出来な詩文はモデルにならないことであつた。むしろそれは「あしきくせ」(同)をつける点では有害でさえあつた。ともあれこのことは、漢詩文の自作の戒めにも繋がっていく。

益軒が批判するのは当節の儒者一般の姿勢であり、漢詩文を学ぶことそのものではない。も

ちろん当世林羅山や熊沢蕃山など、日本の歴史や文学も精力的に学び研究する者もいたわけだが、益軒から見れば、当時の儒者の大勢は中国のことは勉強するがわが国のことをあまり学んでいないようにうつつた。

もろこしの伝記のみを見て、わが国の事にうときは、近きを捨てて遠きをつとむるなり。

緩急の次第を失へりと云うべし。しかれば日の本に生まれたる人は、皆和学に通ずべし。

もはらもろこしの事のみ学んで、やまとの事知らざる人、今の世にも多し。(上之本p.323)

という状況であり、「和歌和文をすててもろこしの風を専に作る事、わが国にそむけり。其のつみふかし。」(下之末p.363)とまで益軒は言う。ここでの問題は学全般の姿勢であり、和学もおろそかにしない「緩急」のありかたであるが、こうした学び方は国俗に即したものであろう。むろん、儒者として漢詩文は学ばねばならない。むしろ国俗ではないから、学ぶのに歴大な時間と努力を要する。このことも、大きく見れば日本に生まれたという制約、「国俗」によるといってしまうことも出来る。漢詩文をなかなか物にできないのは、「国俗」ゆえなのである。和歌と漢詩の問題に即して言えば、和歌ではなく漢詩制作に心血と時間を注ぐ日本の儒者の態度が問題なのである。そして、努力してもそれはほとんど報われない。「詩文章はわがくにのことはにあらざれば、久しく心を用ひて作れる人も、中夏の作にはおよばず。法にかなはずしてひがごと多し。」(同上之末p.334)というのである。ましてや不十分な学びでの漢詩文制作は、許されるべくもない。益軒の同時代の儒者批判は、和学どころか儒学ですらまともに学んで習得していないのにもかかわらず詩文を作る態度にも、いやむしろそれにこそ向けられている感がある。後にも触れるが、漢詩文を制作する際の心構えが問題となるのである。その背後には、中国人でもかなりの労力を要するという詩文制作そのものが孕むある程度の努力と才能の必要性への、益軒自身の厳しいまなざしがある。

詩を多く作りても学問に益なし。詩をよく作る人も心を苦しめ、思案せざれば出来ず、かくの如くせざれば、杜子美といへどもよき詩をつくらず。いはんや此の国今俗の詩をや。拙きことむべなり。日本人唐詩を作るは、ことばも心もかなはず。志をのべがたし。

(同下之末p.362)

整理すれば、「国俗」の観点からは、日本人は漢詩ではなく和歌を学び制作するのがふさわしいということになる。漢詩はよく学んだ日本人のエリートでさえも拙く間違いが多いものを作るが、和歌は古来身分にかかわらず全ての存在が詠むもので、身分が低い者でも上手に詠める可能性が高い。もちろん個々の才能の問題も絡んでこよう。一つ気をつけたいのは、再三言うように和歌も学びは必須であることである。「国俗に」即せばよりよい作品を作りうる和歌においてさえも歌学を学び、良い師匠につき、腕を磨く必要があると益軒は考える。ましてや人心やことばが卑俗になってきている当世の事情を踏まえれば、なおさらである。和歌や、制作に必要な歌物語の素養のない者が「みだりに」詠んでも、日本人だからという理由のみでお

のずから上手には詠めないのである。¹⁸⁾「みだりに」という言葉がここでは重要である。積極的に解釈すれば、人間の力では左右できない「国俗」で全てが決まるわけではなく、自身で積み上げられる努力の可能性が指摘されている。漢詩では容易に報われなかったことが、和歌では努力によって開かれうるのである。逆に、学ばずに詠むことはタブーである。「和歌をしらずんばよむべからず」(同p.339)と益軒はいうが、条件はひとまず和歌を知ることである。人間存在の生を一回性でとらえ、基本的に日々を無駄にせず着々と道を学ぶ姿勢を貴ぶ益軒が、成果が期待できる和歌に対する努力を推奨するのは、ひとまず筋がとおる。ましてやそれに才能の要素が加われば、作詩は日本人に二重の重荷を負わせることになる。才能の問題は、和歌についてもあてはまるし、基本的に学を始めとする全ての営為において、益軒は才能や向き不向きの問題を最重要視はしていないにせよ、等閑視していない。¹⁹⁾ それでは次に、二つ目の制約の考察にうつろう。なお、「才」の問題についても益軒は詩歌というように和歌と漢詩を基本的に並列して扱っている。以下和歌に限定せず、漢詩も含めて考察する。

「才」というとき、益軒は「才力」(同上之末p.335)、「才器」(同p.331)「天才」(同p.336等)の語を使用する。「詩歌の才力なきもの」、「その才器ありて」、「天才なき人」というように、生まれもつての詩歌の才能もしくは力量という意味で使用されていると言ってよい。また益軒は、次のような表現もする。

才学すぐれ、詩に巧みなる生まれつきならずば、詩を作るべからず。才学ありても天性詩につたなき人あり。曾南豊の詩のよからざるがごとし。わが得ざることは好むべからず。和歌は日本の風俗なれど、天性歌よむにはつたなき人あり。歌学ありてもよみがたし。

(同上之末p.340 下線は田畑による)

ここは、益軒の詩歌についてのスタンスを端的に示す重要な箇所である。内容の検討の前に、「天性」という語が使用され、「才学」と区別されていることを確認しておく。では「才」と「天性」は異なるのだろうか。結論から言えば、「才学」の「才」と前述の「才」が異なるものであり、「天性」は前述の語群と同義と考えられる。というのはここでの「才学」は学問をする才能であり、それとは別概念として「詩に巧みなる生まれつき」が挙げられているからである。また前述の「才」はすべて詩歌のことを扱う文脈で表れているので、「詩歌の才能」と解釈できる。

それでは内容を検討しよう。重要なことはまず、上記の引用で「わが得ざることは好むべからず」とある点である。自分が不得意なことは好んではいけないというのは、好んで時間や労力を無駄に費やしてはいけないということである。裏を返せば人間は不得意なことを好む傾向を持つということでもある。好みの規制は『和俗童子訓』巻之一でも触れられているように、人間にとって早くから留意すべき問題であった。ここでは、自分の生まれつきに合うことを好むことが要請されている。きつく言えば不得意なことはするなということであり、漢詩の才能がなければ自分でつくるなということである。なお、かくいう益軒は自分では漢詩をつくり、

自身の漢詩集や中国の漢詩のアンソロジーを作成したりしており、かなりの素養があったようである。²⁰⁾

ともあれ問題は、国俗の制約以外のその人が持つ、個性としての才能である。漢詩では中国人の曾南豊の例が挙がっているが、この例を通して日本人でありなおかつ漢詩の才能が無い者への戒めが示されていると言える。

同じ文脈で、和歌についても同様のことが示される。異なるのは、和歌は「日本の風俗なれど」という断り書きがつく点である。「国俗」「風俗」から見れば日本人は和歌に向いているが、個々のレベルではそれが叶わない場合もある。つまり一方の制約から免れていても、もう一方からは免れないのである。しかもここでは、「歌学」を学んでも自身での作歌が困難な例に言及する。このことは前述の、和歌における努力の余地と抵触するかに見える。しかし才能の問題を踏まえれば、才能がありかつ学べば、和歌を詠んで良いというのである。重要なのは「国俗」の点で、漢詩よりもよい作歌の可能性が開かれているという点であった。益軒は、人間が学ぶことを奨励しつつも努力によっても開かれないシビアな部分をも見据えているのである。

実際才能がある場合は、「その才器ありて詩歌つくらんは、誠によし。」というように作詩作歌は禁じられるどころか、推奨されている。人間の営為には、才能や環境、自身の志、努力など様々な要素が絡んでくるが、益軒はそれらを慎重に見通していると言える。この点を踏まえて、ではなぜ、益軒がことさら不才に対する作詩作歌の戒めに力を入れるのか。そしてその代わりに何を推奨するのか考えたい。この問いは次章の学びの問題とも深く関わってくる。次章に入る前に、これらの問題に関して次の二点を確認しておく。

まず才能の無い者が作詩作歌をすることに対して、益軒は全く益がなくむしろ害があると考ええる。害とは一つには人から笑われ、そしられ、恥をかくことである。²¹⁾それは作品がつたなく間違いが多いからであり、特に漢詩文に関して言われるが、和歌でも同様である。しかも漢詩文や和歌などの創作は再三言うように労力を要し「いたつかはし」(同上之本p.328)き作業であり、精神的な重労働である。さらにそれは時間を要する仕事であり、「読書のひまついえて」(同)、本来時間を費やすべき「学問のさはり」(同)にもなる。このことをわきまえないのはまさしくその当人から見れば「労苦してはちを求むる」(同上之末p.340)ことにほかならない。またそのさまを外から見れば、「見苦しくいやしき」(同p.335)ことなのである。

以上大まかに害をみたがそれを回避し、かつ益がある方法が古詩古歌を誦すことであった。これが第二の確認すべき点であるが、漢詩に関しても和歌に関しても益軒は、モデルとなるよき詩歌を誦すことの方を自作よりすぐれたこととする。

わが拙き詩をつくらんよりは、古人の詩の其の興にかなひたるを誦せば、かへつておもしろからん。(同上之本p.328)

万葉、古今集以下ふるき歌書を見おぼえて、をりにふれたる古歌をうちずせんこそ、わが

つたなき歌をよまんより、心のなやみなく、いたつはしからで、かへりていとおもしろかるべけれ。(同)

いずれも「おもしろし」という表現で評されているが、これは自作が「見苦しいやしき」ものであることと対応する。善悪の概念でかたられていないことにも注意したい。詩歌の本意は風雅である。その風雅が自作ではなく古の詩歌の吟誦によって遂げられるというのは、詩歌の道としての本筋を果たしたことになる。しかもそれは「心をなぐさめ」(同p.326)の効果があった。自己においても他者から見てもその営為は風雅なのである。さらに重要なことは、むやみに古詩古歌を誦すればいいわけではない点である。自身の気持ちに添い、時宜にあった内容の詩歌を選び誦することができること、それが求められている。ここで学びの話が絡んでくる。すなわち、それが可能なのは詩歌を学び、「見おほえて」自身のものにしていくからである。この今の自分の気持ちを十分に表現している詩歌はどれか、今この状況でどの詩歌をよむのがふさわしいのか、それを自分自身でゼロから生み出すのではなく、自分の中にストックされたものから適切に選び出すことができる。ストックすることとそこから選ぶ能力、その習得が学びによって期待されるのであり、才能が欠けていてもそれを十分補うるのである。となれば、詩歌の才能の有無はさて問題ではない。それよりも、自身に才能があるかどうかを弁えながら、学び、古の詩歌を誦す。才能の有無とどう向き合い、本としての聖学の学びを中心とした人としての学びの体系全体で、あるいは自身の人生の中で、詩歌をいかに位置づけ、付き合うのか、それが問題になってくる。そもそも本となる学を妨げず、むしろ学に有益になるような詩歌との付き合い方は、「学問のいとまあらば少の力を用ひて是をならふ」(同上之本p.327)ことであり、²²⁾日本人として学ぶべき和歌であれ、儒者として学ぶべき漢詩であれ、あくまで「末」であることにはかわりない。重要なことは、「末」であることを弁えて付き合うことである。実際、漢詩や和歌を「みだり」に読む者は多くあるが、彼らの態度は「末」を「末」としない態度であった。益軒が『文訓』でさかんに取り沙汰するのも、この「みだり」に作る者の態度であったと言える。この背景には詩歌の才能を持つ者はごく少数だという認識があると推察できるが、大多数の不才の者においては「みだりに」作らず、本の学びを大切に、風雅に関しては「古をものにする」ことがあるべき学びの道筋として求められているのではないか。くわえて教訓書の対象は、才がある者ではなくむしろ大多数の不才の者なのである。

以上を踏まえながら、次章では和歌と学び、和歌そのものへの姿勢などについて検討し、益軒における和歌の位置づけをまとめていきたい。

四、大なる自己が和歌を詠む

古の詩歌をモデルとし、その中でも優れたものを覚え、誦すとは、端的に言えば、小さな「私」である我を捨て、踏むべき「古」という「公」に即することであると言える。なぜならそれに

よって表された情は他者に共有可能であり、また表現方法も、漢詩であれば言葉の使い方文法にのっとり、和歌であれば歌学にのっとりたえば他者がそれを共通に良しとするものを踏まえているからである。それは他者においても十分その価値が伝わるものであるという意味で、「公」なのである。またこの考えには、自分で作ったものではない借り物によって自分を無にしているのではないかという疑問も向けられよう。しかし先にも見たように、自分で作るよりは古の詩歌による方が自身の情を十分に表現しうるのである。いわばこれは自己の解放である。逆説的だが、古という他者を通して、自己が一層自己となっているのである。つまり、小さな自己が、その状態にとどまっているだけではたどり着けなかった境地へと自らを開いていく、これが古を学び自分のものとするのもう一つの重要な面であった。

以上を踏まえつつ、益軒が批判する、自身で詩歌を作ろうとする人の姿勢を見てみよう。益軒によれば、自らつくる人は、作るだけではなく、他者に披露するが、そうした当人の心構えを益軒はほこること、そして「私」という概念で説明している。たとえばこうである。

わがともがら、詩歌の才力なきもの、詩歌の作りがたきことをしらで、みだりにこのんで作れば、さこそ見ぐるしくいやしきことは、人にわらはるべけれ、人つげざればあしき事をしらず。かへつてみづからはよきとおもひて、ほこりて人にかがやかす。(同上之末p.335)

ここでは、自分の詩歌の下手さを知らず、むしろ自分ではよいと思って披露するあさはかさが指摘されている。この自らをよとし誇ろうとする心のありようがまさに「私」なのである。「私」は自身のことさえも正当に評価する力を当人から奪う。この背後には、人間には容易に自分を測れないという益軒の人間理解が潜んでいる。

常人は我が身をしるにくらし。是私の一字まぬかれがたければ也。わが身に才知なけれどありとし、小あるは大にありとす。学問芸能つたなけれど、すぐれたりと思ひて人に対してほこるは、我が身をしらざる也。是愚なるなり。

又、わが詩歌、文章のつたなきをよしとおもひて、人に示すこと世に多し。(同下之本p.341)

この態度は詩歌を含め、文章、学問芸能全般に通じるものである。詩歌についても「わが作れることはわが心の私にひかれ、そのほどよりよくみえ」(同上之末p.331) てしまう。益軒はことに漢詩文にかかわるこの傾向を、「ことに詩文はわが国のことばにあらず。」(同下之本p.341) として漢詩文の学びが不十分なままに作り、かつ披露することを「我が身をしらざればなり」(同p.342) と糾弾する。これは和歌とて同じである。漢詩文に即して言われることから、自己について知る難しさと、それに伴う自己と対象物との距離のはかりがたさの指摘が読み取れる。そもそも人間は自分についてよく知らず、良い評価をする傾向がある。それは人間の営為全てに当てはまるが、この点に留意して振る舞う必要があると益軒は言うのである。ことさら自己から距離の遠いもの、たとえば漢詩文においてはその遠さを認識して、ことさら漢詩文を学び、正しい言葉や文法を身につける必要がある。これはもちろん和歌でも同じであ

る。歌学をせずに言葉も文法もめちゃくちゃな和歌を詠んでも、それはもはや和歌とは言えない。和歌とは言えないとは、それが体裁を整えていないのみならず、和歌の本意である「心をなぐさむ」機能を果たさないからである。²³⁾「和歌をしらずんばよむべからず」(同上之末p.339)とはこの謂である。

和歌と漢詩との違いはただ自己からの遠近にあるのみであって、「私」に惑わされず、自身の作るものにほこらない態度で制作することが要請される。「私」という小さな自己に惑わされないとは、二つ意味がある。まずは自作の詩歌をよいと評価しないこと、そして古のモデルにより正しい法則とことばで制作できるよう努力する必要性を自覚してたえず学べることである。つまり益軒は、そもそもの人間の持つ「欠け」、「私」に流される傾向を踏まえながら、それをないがしろにしない姿勢を学問芸術の芸にも求めている。これが詩歌、特に日本人に近いものであるはずの和歌にも言われることから考えれば、益軒の主張の重要性は一層浮き彫りになる。土地の天性として、また習俗としてやりやすいとしても、いやむしろやりやすいからこそ取りこぼされる可能性のあるゆえに、和歌における人間が免れ得ない小さな自己との対峙の重要性が指摘されるのである。

もちろんみんながみんな自分の詩歌は優れているから披露しようという心づもりを持っているわけでもない。その点を益軒もおさえてはいる。

又みづからのつたなきことをしりて、我が作にほこらざれども、其の人おもへらく、古人の如くうはしくはならずとも、只時々景氣をながめ情をのべて、心をなぐさめんれうなれば、つたなくとも害無しとおもひて、詩を作ることを好めるなるべし。今時の人の作れる詩、つたなくしても大やう詩の法にかなひて、ひがごと少なくば、其の人に応じ情を述ぶる助ともなりなん。(同上之末p.339)

これは漢詩への言及であるが、この後和歌についても同様の議論を益軒は展開している。²⁴⁾必要なのは、自分が下手だという自覚だけではない。正しい法にのっとって作られていれば情を表現するのに役立つというおとり、学んで正しい詞と文法で作れることも同時に必要である。前にも少し触れたが、そうでなければ詩歌は詩歌でさえあり得ず、心を慰めるという当人の目的も果たせないのである。益軒の口ぶりからすれば益軒は、今世の人はこの2条件を満たしていない人が圧倒的であり、詩歌では無いものを作っているという認識をもっていると推察できる。つまりほとんどの人は「私」に囚われているのである。下手を自覚し、ほこらないという「私」から解放されていても、古の良い物に学び古の詩歌を誦した方がみづからの情を遺憾なく表現でき、慰めを得られるという考えには至っていないとすれば、その点でその人はまだ「私」に囚われている。すなわち、自力で慰めを得られると思っているのである。

「私」からの解放ということに関してもう少し述べれば、良き師や友に聞き、研鑽を積むことを益軒は挙げている。むやみに披露せず、師にきいて改めることが重要なのである。²⁵⁾ 人に

聞くことの重要性は、益軒が学び全般に即してよく指摘することである。それは学ぶ姿勢の中核におく「謙虚さ」ともつらなる。これは自分の卑小さを知り、その卑小な自己から抜け出ることである。人に聞くとはつまり、自己の相対化の作業といっても良からう。それは自己を大きなものへと変えていくために必須の作業である。学問芸術全般に即して共通する重要な姿勢、それが小さな自己からの脱却であり、「公」を踏まえた大いなる自己を目指すことなのである。

そしてこの大いなる自己に関連してもうひとつ重要なのが、詩歌であれば「古の詩歌」であった。「古人のつくれるよき詩歌の、其時とその事にかなへるを吟ぜば、心をつくしてあしき詩歌をつくらんよりは、はるかにまさりてたのしみふかかるとべし。」(同上之末p.331)「おもしろかるべし」(同p.332)、「なさけふかかるとべし」(同p.334)とあるように、益軒は古の良き詩歌による今の自己の情の表現に大きな価値を置く。それはまさしく下手な和歌を作って陥る「かかる歌をよんでは、わが心をなぐさむべきやうなくして」(同p.336)という状況と真逆である。今の自己の情のありようや置かれている状況を的確に表せるものはなにか、それは古の詩歌だと思ひ至ることができたとき、小さな自己から解放される。古の詩歌は、他者の作品ではあり、その点では距離があり、借り物とも言えるかもしれない。しかし、学びがその距離を小さくする。ましてや、心や言葉で近い和歌ならばなおさらである。詩歌の学びは、自在に自身や時にあった内容の和歌を選び取り、吟じる力を人に蓄えさせる。自分のものではないが自分のものになっている。その証拠は、自在に取り出せること、そしてそれによって自分の心が確実に慰められることにある。自分で作らないとは、自己の放棄にみえる。しかしここでは逆説的に、自己の放棄こそがより大きな自己、古と連なる自己、もっと言えば古そのものである自己が詩歌を作ることを可能にさせる。まさしくこれは、大きな自己が詩歌を作る状況である。そもそも古来、その状況、時節に合う詩歌を誦すのは王朝物語にもよくあることで、むしろ教養でもあった。我を主張するのではなく古に寄り添い、古と一体化する。その営為が、詩歌、ひいては和漢の文章全般にも言われている。そしてそれは聖学の学びの姿勢にも連なっている。

ところで、『文訓』のなかには和歌をどのように習得するか、具体的には書かれていないが、てがかりとなる語がある。それは「誦しおぼえて」(同上之本p.326)という語である。何度も誦し覚え、身につける。そして自分の言葉や心のように表出する。まさに自分のものにするということである。これは小手先で文法や言葉を学ぶことや、歌学の理論をたたき込むことでもない。また和歌の学びは漢文の文章を学ぶときの姿勢として益軒が、「心にかなへる文をゑらびて、三十篇ばかりをそらんじ、書きをほえて熟誦すべし」(同 p 329)と説明することから類推できる。そうすれば「おのづから文法をさとり、文字の書きようをしる」(同)というが、この方法は、益軒が『和俗童子訓』巻三でも挙げている書物の学び方の基本でもある。四書五経の熟読と記誦とは、「義理の学問の根本」、かつ「文章を学ぶ法則」であり、「学問の要訣」であるとする。また、文章についてはとりわけ『孟子』の学習を薦め、「文章の法則とな

り、筆力を助」けるとする。²⁶⁾ 熟読と記誦は、そらにその文章を唱えること、そらに書くことを可能にする学習方法である。それはまさにすべてをまるごと自分に取り込むことであり、一時しのぎに外から何かを借りてくる手法ではない。益軒は和歌、ことに古歌を学ぶときにも、こうした身になる仕方を同様に想定していると言える。自分のものになっていけばそれはもはや、借り物ではない。自己と古が一体化することで、十全に自身を表し、また他者に伝えることが可能となる。それは第一章で明らかにしたそもそもの和歌の機能を十全に発揮することでもあったのである。

以上、益軒の和歌の位置づけについておおまかにみてきた。学びという観点からは「私」をこえる仕方として、全ての学びの営為に通じる方法が前提とされていることが、推察できた。このことを踏まえれば重要なのは、「私」をこえた良きものの取り入れであり、和歌を実際自分の力で詠めるかどうかは二次的な問題であると言える。ただ自分の才の有無は弁えておく必要があった。それに加えて、和歌を詠むことが国俗、風俗からして、漢詩よりも向いているという、全ての日本人が共有する性質の自覚も必要であった。つまり大小両面からの天性、うまれつきのありようを自覚するということである。さらにこれも国俗、風俗に含まれるが、和歌ですら真剣に学ばざるをえないという状況の自覚も必要である。これらの自覚は、和歌を詠む主体の立ち位置の明確化を可能にする。古来、貴賤を問わず全ての存在に開かれてきた和歌を詠むという営みは、こうして当世の才の無き者については、古という「大きな自己」が和歌を詠むという形で、開かれるのである。

ところで便宜上、同じ「風雅の道」である漢詩と同列に論じることが多くなったが、以上の自覚云々の問題は、むしろいかに漢詩に向き合うかと不可分に結びついている。益軒が和歌との対比で、ことさら漢詩の自作への戒めを強調する意図を持っている点は否定できない。この点も考慮しながら、和歌との相違を一つ再確認しておく。漢詩は国俗に合わないことのみならず、「文字を業とする人にあらずんば、詩は作らずともありぬべし。」(同上之本p.330) というように全ての人の営みとしては要請されていない。前述したように、情の表現は和歌で事足りるからである。しかし「詩は学職にある書生の外は、やむ事を得ざるにあらず、天才なくんばつくるべからず。」(同上之末p.331) というように学者であっても、「天才」がなければつくってはいけないと、さらなる規制がかかる。ここから分かるのは、漢詩がそもそも全てに開かれるわけではなく、学者のありようと不可分に考えられていることである。このことに関してたとえば深沢一幸氏は、益軒の漢詩の評価基準は「芸術性文学性ではなく、思想性、哲学性におかれている」(深沢一幸「詩人としての貝原益軒」横山俊夫編『貝原益軒 天地和楽の文明学』平凡社1995 p.75) と指摘する。また氏は益軒自身の漢詩を「詩人の詩ではなく、やはり儒者の詩」(同p.95) と評する。²⁷⁾ 漢詩は和歌と同様「雅の道」ではあるが、益軒自身の中では聖学を学ぶことと不可分に結びついている。だからこそ、漢詩を作るのに費やす時間で多くの本

を読めと、ことさら言うのである。聖学を学ぶ者としてはその本をしっかり努めることが重要であり、雅な漢詩をいかに自力で作れるかは全く問題ではないのである。和歌とのセットで漢詩に対する注意が促されるのは、ことさら聖学を学ぶ者の立ち位置に限定されてのことであろう。むしろこれが一般の民に敷衍されても、問題はない。

一方、和歌はどうか。結論から言えば、和歌については全ての日本人を対象として語られていると言える。風雅が人間の情と関わるものと位置づけられていることから、情を持ち表出する人間存在、特に日本人にとって和歌は必須の営みであった。しかしそれも、自分で詠むことは要請されない。土地と風俗と、言葉と心を共有する者として、古を真に自分のものに出来れば、いいのである。益軒の漢詩と和歌に対する温度差は、それにどの程度の人に関わるかによって、益軒においては日本人がそもそも向いていない漢詩文をどのように学ぶかが大きな問題であったと考えられる。したがって和歌の問題は、裏返せば、外なる漢詩をいかに内にするかということを考える通路でもあったのである。もっと言えば、和歌を漢詩とセットで取り上げることで、当世の日本人が忘れがちであった和歌の位置を知らしめたのだとも言える。

最後に漢詩であれ和歌であれ、良き詩歌を学びという後天的な営為を通して自分のものとすることは、国俗やオの相違をこえて、人間が共有しうるものの存在を指し示すと言える。つまり人間存在としての基本的基盤があるということである。益軒は、土地、時代、そして個々人のそれぞれの個性を見据えながら、人間としての「風雅」を共有できる普遍性をみだしていたのではないか。中国ではそれが漢詩、日本ではそれが和歌という形であっただけではかならない。だからこそ末ではあれ、詩歌の道はその場所を得ているのである。ただ、この相違を見据えることが重要とされたのである。天地の楽しみを享受し、人の気持ちを理解し、共感する、そうしたありようは人間全般に与えられている共通の基盤である。それがあつた限り、漢詩は向いていないから全く学べないとシャットアウトする必要もなくなる。言い換えれば漢詩との距離を縮める可能性もここにあるのではないか。また当世と古代の間の日本人としての和歌との距離をも縮められる。益軒はそう考えていたのではなからうか。

もちろんこの考察は、他の益軒の学びに関する教訓書といわれる著書、益軒自身の漢詩や和歌などを一層綿密に検討することで深めていく必要がある。また益軒は、人間は文がなければ欠けた存在であるとするが、逆から言えば、文だけでも欠けた存在である。文武が並び立つと言うときの文のイメージを考え合わせることで、最後に挙げた人間存在の共通基盤についての考察を深めることが出来るのではないかと考えられる。次回は『武訓』との関連で、考察を進めていきたい。

注

- 1) 益軒のナショナリズムについてはたとえば、松田道雄「貝原益軒の儒学」(松田道雄責任編集『貝原益軒(日本の名著 14) 中央公論社 1983 の pp.28-30 でも簡単に指摘されており、益軒の日本の肯定的な見方については、共通理解があるといつてよい。氏は益軒の『神祇訓』の叙述をもとに日本の優越性と土地の関連についての益軒の考えに触れている。益軒のナショナリズム的な考え方について言及する場合は、氏も依拠している『神祇訓』等をはじめとした他の著書も参照し、神の捉え方などにも着目しながらまとめる必要がある。なお中国と同等、もしくは中国よりも優秀という立場は、益軒に一貫してみられる基本的立場である。『自娛集』巻之二にも「本邦七美説」など日本の土地風俗の正しさ、美しさを指摘する文章が見られる。特に皇統の持続が中国に比して優秀とされる例の一つとして挙げられる点は、ナショナリズム的な特質を見る場合には、注目すべきであろう。『自娛集』(『益軒全集』巻之二 1911 所収)、ならびに拙稿「貝原益軒『自娛集』巻之二「国俗論」「本邦七美説」解釈(『日本倫理思想史研究』第 15 号 2014 富山日本倫理思想史研究会 pp.23-32) 参照。ともあれなぜ和歌を学ぶのかを考える際に、それが風雅で美しいものであり、日本ならではのものだと言われるならば、益軒の考える日本の特質、日本がその存在の根底とするものを踏まえる必要は当然ある。学びに焦点を置く本稿では立ち入ることが出来ないで、問題の重要性を指摘するにとどめておく。この問題は機会を見て総合的に考えてみたい。
- 2) 『文訓』は益軒没後の享保 2 年、遺稿をもとにして門人が編集し、刊行したものである。益軒は文武を車の両輪として考えていたが、これとセットで『武訓』の遺稿も刊行されている。合わせて『文武訓』と呼ばれ、明治 26 年に西田敬止が益軒の教訓書の中から 10 の著作を撰んで編んだ『益軒十訓』にも収録されている。『文武訓』は益軒自身が刊行したものではなく、益軒自身のまとまった考えを引用したり、考察の対象としたりするには、生前刊行されたものの方がまとまっているので適切だという考えも一方でありうるが、本稿では本文で挙げた理由の他にこの書が『十訓』に選ばれている点、益軒の学びを考える際に文武のことは一つの要となる点なども踏まえて、『文訓』を中心的な考察対象とすることにしたい。さらに序を書いた益軒の門人竹田定直の言葉においても、正確に益軒の意図や考えを読み取り、誠実に遺稿を尊重し世に広めようという態度が読み取れるので、門人による曲解や必要を超えた改訂はないものと見てよいと判断しうるし、生前の著書における内容との整合性も認められるため、ということも付け加えておく。
- 3) 人が人となるために必要となる知を巡る問いは、日本倫理思想史を研究するにあたり、どの研究者もつねに自身の中に自分の問題としてももっておくべき問いであり、真摯に問い続けるべき問いである。この問いについては様々な研究者が、特に近世を素材として提起し問い続けてきたが、たとえば菅野覚明氏は「日本思想の根本問題」(『理想』No.648 理想社 1992 pp.24-31) で、山崎闇齋など近世の儒者のスタンスをもとにしながら、儒学国学のありようを考察している。また伊勢源氏など王朝の文学を本に「もののあはれ」を知り、人情をしるという教養の身につけ方の系譜については、坂東洋介氏とその倫理的価値について非常に深い考察を行っている。坂東洋介「和歌・物語の倫理的意義について－本居宣長の「もののあはれ論」をてがかりに－」(『倫理学年報』第五十九集日本倫理学会 2010 pp.217-231) 参照。
- 4) 『文訓』からの引用は、『益軒全集』巻之三(益軒全集刊行部 1911) 所収のものによる。なお益軒は「和歌をよまば情をのぶるに事足りぬべし」(同 pp.327-328) と述べ、情の表出には漢詩などは必要なく、和歌で十分であると考えている。この点からも日本人が和歌を学び、詠む必要の主張が読み取れる。
- 5) たとえば「今の世の中、色につき、人の心、花になりけるより、あだなる歌はかなき言のみいでくれば」(佐伯梅友校注『古今和歌集』岩波文庫 1981p.14) とある。なおこの点からも、益軒の和歌理解は『古今和歌集』仮名序をもとにするものと考えることができる。ちなみに、詩賦がやはり日本人が和歌を詠まなくなり衰えたことについても、益軒は『古今和歌集』をもとに指摘している。『文訓』上之本 p.327 参照。
- 6) 後にも触れるが、小さい頃からの習慣を正しく整える必要を要する益軒の幼児教育においては、は

『文訓』における「和歌」の位置づけ

やりうたなどは欲をかき立て、道を踏み外すものとして捉えられ、それを好まないようにと注意が向けられている。その際益軒は、「日本の俗に玩ぶ散楽」は「章歌いやしく道理な」（『和俗童子訓』巻之一 p.178）きもの、あるいは「淫楽」（同 p.177）とする。この場合、日本の俗の楽は「もろこしの楽」（古楽）と対比され、上記の理由によりその価値が低いとされている。また『和俗童子訓』巻之五で女子教育について述べる箇所では、「小歌、浄瑠璃、三線の類、淫声をこのめばこころをそこなふ。」（同巻之五 p.217）とし、それらを「いやしきたはぶれごと」（同）としている。ここは厳密には和歌の話ではないが、当世のはやりの歌は淫靡であるという理解には、当世そのものの風潮への厳しい視線がうかがわれる。歴史的社会的背景を踏まえれば、貨幣経済の浸透に伴う人々の風俗の軽佻浮薄な傾向への批判などがあるとも考えられる。また女子教育については、「伊勢物語、源氏物語」について「其の詞は風雅なれど、かやうの淫俗の事をしるせるふみ」（同）として、学びの上での留意を促している。なお『和俗童子訓』からの引用は、『益軒全集』巻之三所収のものによる。

- 7) 「和歌はわが国の風俗にて其のことはしりやすく、其のことはりもさとしやすければ」（『文訓』上之本 p.326）というように、益軒は再三、漢詩に比して和歌の学びが日本人に向いていることを主張する。その根底には、それが風俗、国俗であるゆえに借り物ではなく、自分との距離が親密であって、それゆえに真に自分のものとしやすいという考えがある。自分のものにすれば、情や志の表出・伝達は十分にできる。したがって和歌の機能を十分果たすという観点から見ても、言葉の問題は最重要事の一つである。
- 8) この箇所は和歌和文の学び、特に和文の学びについての留意点である。要は、取捨選択が必要だということである。「此等の書（伊勢、紀貫之、紫式部、清少納言の文）には、淫靡なること多し。只その詞をとりて不経なるをばすつべし。」（同下之本 p.346）
- 9) 人やものを愛し大事にすることが、天地の、物を生じ養う心を心として持つ人間存在の為すべき善であることは、『大和俗訓』『和俗童子訓』『五常訓』などにもみられる益軒の基本的な考え方である。
- 10) もちろん、益軒においては切なる情愛の深さそのものが全て価値を持つとは考えられてはいない。特に親の愛は親を盲目にする危険性を持つと考えられている。『和俗童子訓』巻之一参照。したがって、重要なのは切なる情愛を野放図に解放することではなく、理にしたがって表出することであろう。
- 11) 『慎思録』巻之四（『益軒全集』巻之二 1911 所収 p.87）原漢文を書き下した。
- 12) 「楽」についても益軒の主著の随所に散見されるが、詳しい議論は『楽訓』で展開されている。
- 13) 益軒は『千載集』序を引きながら、どの存在も和歌を学ぶべきである旨、主張している。「もののふも和歌の道知らぬは、他の才芸ありても風雅なる心なくて、むげにいやしく人に見おとさるる、口をし。千載集の序にも、和歌の学をさして、是をまなびたづさはらざるは、面をかきにしてたてらんがごとしといへり。学問のいとまあらば、少の力を用ひて是をならふべし。」（『文訓』上之本）p.327
- 14) 「和歌は万葉集をはじめとして、古今集より下つたか、世世にありあつめられし二十一代の歌集、次に家々の集あるべし。いとまあらば見るべし」（『文訓』下之本 p.346）および、8）参照。
- 15) 8）参照。
- 16) 『文訓』上之本 pp.328-329 参照。同様のことは随所で述べられている。
- 17) 『和俗童子訓』では巻之三を中心に、『文訓』においては上之本 pp.328-329 等で述べられている。漢詩及び文章については何をモデルに学ぶかが明確に示されている。
- 18) 『文訓』上之末 pp.339-340 参照。
- 19) たとえば、『慎思録』巻之六には人間の性には「分」があり、「分内の事」に尽力することが挙げられている。この「分」とは人間が生まれつき持つ力量ということができよう。注目すべきは、「分外の事」をすれば、悔いことになるという点である。ここは国俗に合わない無理なこと－漢詩を作ること－を苦勞しても益どころか損になるという理論と通う。『慎思録』（『益軒全集』巻之二 p.133）参照。
- 20) 深沢一幸「詩人としての貝原益軒」横山俊夫編『貝原益軒天地和楽の文明学』平凡社 1995 pp.69-96 参照。たとえば深沢一幸氏は貝原益軒の漢詩に対する態度を、『文訓』や『自娛集』の「学詩説」をもとにその基本姿勢を確認した上で、益軒が漢詩に対して実際にどう関わったかについて緻密に考察して

いる。氏は益軒の漢詩集『西帰吟稿』における益軒自身の作品を考察し、「詩人の詩ではなく、やはり儒者の詩」(同 p.95)であると評価している。また氏はたとえば益軒が編集した中国古典詩のアンソロジー『歴代詩選』の中身を綿密に検討し、宋以降の儒者の詩が多く取り上げられているところから、益軒の評価基準は「芸術性文学性ではなく、思想性、哲学性におかれている」(同 p.75)と指摘する。また作詩の手ほどきの本『初学詩法』を作成するなど、益軒自身は「漢詩に対する興味、そして素養は、なみなみならぬものがあつた」(同 p.77)と指摘する。益軒の漢詩に対する態度が「儒者として」のそれであるという氏の考察は非常に示唆に富む。この視点は、益軒における漢詩と和歌の捉え方の違いをみるときに有効である。さしあたり、和歌を考えるときは「日本人としての」ありよう、漢詩を考えるときは「学びの道を進む儒者」としてのありようにより力点が置かれていることが、推察しうる。

21) 『文訓』上之本 p.328 参照。

22) 『初学訓』卷之四では、自然の風物をめでて詩歌を誦すことを「風雅なる君子の楽」とするが、道に妨げのないよう、適切に好むことが示されている。

23) 益軒はここで漢詩の作成について話題にしているが、その際の姿勢をより明確にするために、和歌を引き合いに出している。和歌でも十分な学びが必要であること、古のものを詠むほうがよいことを指摘することで、漢詩の作りがたさを強調している。「…和歌をよむに歌学無く、久しく心を用ひず、又官家の伝を得ずしてみだりによめば、詞のつづきも古のことばにあらず。てにはも法にちがひ、一首の心きこえざれば、和歌とはいひがたし。かかる歌をよんでは、わが心をなぐさむべきやうなくして、必ず人にわらはる。」(『文訓』上之末 p.339)

24) 23) 参照。

25) 「もし詩歌を作らば、詩歌をよく知れる人を師として、其の人に見せて其のあしきを改むべし。もし明師にあはずんば、略詩歌をしれる正直なる友にみせて、その評論をうけて改正し、其の後人に示すべし。」(同上之末 p.331)

26) 『和俗童子訓』卷之三 pp.202-203 参照。益軒はここで四書をそらんじ自分のものにするのが、他の書をも自由自在に読み解く基礎的な力の養成であると考えている。それは文字や文法だけではなく、書かれている意味(義理)の習得をも約束する。何を学ぶにせよ、こうした基本形が益軒の中には描かれている。ポイントは外を内にする学びである。この辺りの発想は、荻生徂徠の学びの考えと類似点がある。

27) 20) 参照。